

保 育

3歳児の人とかかわる力を育てるための援助のあり方

中山 芙 充 子

1 研究の目的と背景

近年、少子化・核家族化の進行や地域の人間関係の希薄化などにより、子どもたちが多様な人間関係を体験することが困難になり、「人とかかわる力」が育っていないという指摘がされている。

子どもたちは、幼稚園に通うまでは親とのかかわりが主である。自分と同年齢の子どもとかかわる経験が少ないため、友だちとのかかわり方が分からず戸惑ったり、自分の思いを押し通したりする子どももいる。さらに、年齢の異なる子どもとかかわることも少ないために、相手によっていろいろなかかわり方があることを知らない子どももいる。このように、現代社会における子どもたちの人間関係の経験の乏しさを考えると、初めての集団生活を体験する幼稚園の役割は重要である。

とりわけ入園する3歳児のころは、家庭という限られた世界から一歩踏み出し、園生活を送る中で、いろいろな人の存在に気づき、かかわりを求めるといのように、「人とかかわる力」の基礎を培う重要な時期である。

では、入園当初は自分のことに精一杯の3歳児が、安心して園生活を過ごし、周りの様子に気づいたり教師や友だちなどの相手の言動に心を動かしたりするようになるためにはどのような体験が必要なのだろうか。

榎沢(2012)は、子どもが人とかかわる力を豊かに身に付けていくために必要な多様な体験として、次の二つの面を挙げている。一つは、同年齢、異年齢など様々な人々とかかわるを体験すること。二つめの側面は、「肯定的な体験」と「否定的な体験」の両方を体験することである¹⁾。また友定(2008)は、「子どもは園生活において、友だちと

ともにうれしいことや悲しいことを体験し、教師に支えられて、その子どもなりに人とかかわる力を育てていく。そのため、肯定的感情も否定的感情も同様に大事にされる必要がある²⁾と述べている。

このことから3歳児の人とかかわる力を育てていくためには、教師や同年齢・異年齢の友だちと一緒に活動することを通して、自分の思いを出し、楽しさや喜び、葛藤する気持ちなど様々な感情を体験することが大切であると考えられる。このような体験を重ねるためには、3歳児が安心して自分の思いを出し、周りの環境や人とかかわることができるような援助が必要であり、教師が一人ひとりに応じた援助をすることが重要である。

そこで、本研究では、3歳児が入園を通して教師や同年齢・異年齢の友だちと出会い、様々な感情を体験する中で「人とかかわる力」が育まれていく過程に着目する。その上で、3歳児の「人とかかわる力」を育てるための教師の援助を明らかにすることを研究の目的とする。

2 3歳児の人とかかわる力とは

本研究では3歳児の人とかかわる力を次のようにとらえている。

“3歳児の人とかかわる力”とは、教師や同年齢・異年齢の友だちとのかかわりの中で、安心安定し、自分の思いを表情や動作、言葉で相手に伝える力ととらえている。

幼稚園教育要領解説(2008)では、「人とかかわる力の基礎は、自分が親や周囲の人々に温かく見守られているという安定感から生まれる人に対す

る信頼感をもつこと、さらにその信頼に支えられて自分自身の生活を確立していくことによって培われる。」³⁾と示されている。入園当初の不安定な3歳児にとっては、何よりも教師との信頼関係を築くことが必要であり、それを基盤としながら安心安定し、様々なことを自分の力で行う充実感を味わうようにすることが大切である。

また、3歳児は、表情や動作などで人とかかわる姿が多く見られる。気になる子にくっつく、近づいていく、泣く、遊んでいる様子を傍観するなど、表情や動作などで友だちにかかわっていくことを通して、言葉でのやりとりも生まれ、気の合う友だちができていく。そのため、3歳児が思いを出す時には、言葉だけでなく、表情や動作なども大切にしたい。

3歳児でこのような力を育むことで、4歳児で、自分の思いを出しながらぶつかり合ったり、5歳児では、相手の思いを受け入れながら互いの存在を認め合ったりすることができるようになっていくと考えている。

3 研究の方法

(1) 対象児

年少組3歳児28名（男児14名 女児14名）

(2) 観察期間・場面

平成26年4月から7月、9月から1月

好きな遊び・まとまった活動の時間において、同年齢・異年齢の子ども同士がかかわり合っている場面。また、肯定的場面だけでなく、否定的場面も大切にしている。

(3) 方法

3歳児が同年齢、異年齢の友だちとかかわる様子を実践事例として書き起こす。この実践事例を用いて本園で実施している教師7名を対象にした保育カンファレンスと3歳児の担任自身による事例の考察を行う。その中で、教師の環境・援助が適切であったかを検討するとともに、よりよい環境・援助を明らかにする。

4 実践事例

実践例1 (出会い・安心安定)

「近くにいることがきっかけとなって」（4月）

<背景>

初めての幼稚園に不安な様子のA女とB男は、教師を独占したい気持ちが強く、自分だけの先生でいて欲しいので教師をお互い譲らず奪い合う場面がよく見られた。

①「先生の右手と左手」

この日も、「せんせい、手つなごう」と教師の右手にはA女、左手にはB男が手をつないでいる。木のお家へ歩いていると、C女が「私も行く」とついてくる。2階にあがると、C女が窓を覗いて「飛行機見えるね」と言う。教師も覗き「本当だね、飛行機見えるね」と言うと、A女とB男も一緒に覗きこむ。飛行機の遊具では、同じ組のD男が運転席に座り操縦している。「D君、やっほ〜！」と教師が言うと、A女、B男、C女も一緒に「やっほ〜！」と言う。すると、D男も気づき手を振る。それがうれしかったのか、その後も3人は声を揃えて「やっほ〜！」と繰り返し言っている。

次の日も「先生、窓から一緒に飛行機見よ！」と誘われ、3人で一緒に「やっほ〜」といろいろな友だちに声をかける。友だちが手を振りかえしてくれると3人で顔を見合わせ笑顔になる。そのひとときが楽しかったのか、その後は、教師の近くで虫と一緒に探したり、さくらの花びらを集めたりしてかかわって遊ぶようになっていった。

【考察】

3歳児は、近くにいることが相手への関心がうまれるきっかけになることが多い。近くにいるからけんかもするが、近くにいるからこそ相手のことがよく分かる。事例①では、教師を介して、近くにいたA女とB男は、自然にかかわることになったのだろう。

またA女とB男は、常に傍らにいてくれる教師

の存在が心の拠り所になり、自分で気持ちを切り替えられるようになっていった。この「先生はいつもそばにいてくれる」という安心感をもつことで、周りの友だちともかかわりが広がっていった。このように、入園当初の3歳児は不安そうな様子を見せたり、教師のそばに常にいたりする子どもがいる。どのような姿でも自分のありのままの気持ちを出し、それを教師に受け止め、受け入れてもらうことによって、幼稚園に安心感をもったり教師に信頼感をもったりする。

そのため、初めての集団生活に戸惑う入園したての時期には、まずは教師の温かい見守りのもとで、安心安定し、自分からかかわってみようとする思いがもてるように寄り添っていくことが大切である。

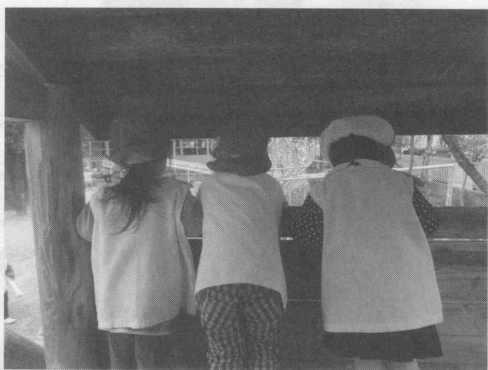


図1 2階の窓から一緒に「やっほー！」

実践例2 (安心安定、共感)

「共感する気持ちが伝わって」(6月)

<背景>

D女は、4月から5月にかけて母親から離れがたく、涙が出る姿があった。6月、少しずつ幼稚園にも慣れ、安心して母親と離れられるようになった頃である。

①「痛い痛いのとんでけ〜！」

D女が保育室で大声で泣いている。教師が聞くと、「誰かにぶつかった」と泣きながら頭を指さす。どうやら、誰にぶつかったかは、分からない様子である。教師が頭の様子をみていると、心配

そうにE女たちが集まってくる。大泣きしていたD女は、涙も鼻水もたくさん出ている。教師が鼻水をとろうとティッシュを出していると、E女も同じように自分のティッシュを出し、何も言わずにD女に手渡す。F男は、自分のハンカチをD女の目にあてて涙を拭いている。そして、教師がD女の頭を見たりさすったりして手当てをしている様子をじっと見ている。するとH男は「“痛い、とんでけ〜”ってしたらいいよ」とそっと教師に言う。教師が、「痛い痛い、先生にとんでいけ〜！・・・あいたたた！痛い先生にとんできたよ」とおどけて言っていると、泣き止んだD女がクスッと笑う。それを見て、みんなもパッと笑顔になり、それまでの緊張感がほぐれていった。

②「この子、ティッシュの子！」

D女が泣いてから2日後の朝。登園してきたD女とあいさつしていると、ちょうどE女も登園してきた。

するとD女の顔がパッと明るくなり、「この子、ティッシュの子！」とE女を指さして言う。教師が「ティッシュの子？」と不思議そうに聞き返すと、D女の母親が「この間、“D女が泣いたら、Eちゃんがティッシュをくれたんよ”とうれしそうに言ってたんです。そのティッシュ、大切にまだ持ってるんですよ」と教えて下さる。すると、D女が「ほら」とカバンから1枚のティッシュを出して教師とE女に見せる。かわいい絵が描いてあるティッシュだったので、E女も「Eちゃんの」と喜ぶ。「そっかあ、Eちゃんに優しくしてもらってうれしかったんだね」と教師が言うと、「うん！」とD女は満面の笑みで答える。すると「ねえ、今日、一緒に遊ぼう！」とD女が言い出す。E女も「うん」と言って笑顔になる。

その後2人は、一緒に身支度し、手をつないで園庭に遊びに出ていった。

降園の際には、D女がE女を自分から誘って仲良くなっていった様子を母親にも伝え、4月の頃からの成長を喜び合った。

【考察】

事例①では、E女もF男もD女に声をかけているわけではない。だが、泣いているD女が気になり、ティッシュを差し出したり、ハンカチで涙を拭いたり、自分なりに寄り添いできることをしようとしている。この時期の3歳児は、自分の思いをまだすらすらと言葉にできないこともあり、動作で表すことが多い。泣いているD女を心配し、思わず体が動いたのであろう。3歳児には、友だちの悲しむ姿を見て心動かされ、自然に共感して行動する姿が見られる。

また、E女が教師のまねをしてティッシュを出したことからも分かるように、子どもたちは教師が泣いているD女にかかわる様子もよく見ていて、かかわり方を感じとっているようであった。このように、子どもたちは直接教師が自分にかかわっていない場面でも、他の友だちへの教師のかかわり方を見て、どのように接したらよいかなどを見て学んでいるのである。そのため、教師は、葛藤場面の解決など様々なかかわり方を当事者ではない周りの子どもたちにも見せたり、ともに考えられるようにしたりしていくことが大切である。

事例②で、D女がもらったティッシュを大切にカバンにしまってとっておいたことから、E女に優しく渡してもらったことが心からうれしかったことが分かる。E女がティッシュを渡したことは、見方によってはとるに足らない小さなできごとであるけれども、D女にとって、その体験は、E女への親しみの気もちが大きく膨らむ重要なできごとになっていたのだ。また、D女は、少しずつ幼稚園にも慣れ、安心して母親と離れられるようになった頃だったこともあり、自分からE女を誘うことができたと考える。このように、「一緒に遊ぼう」などと声をかけ合い新たな友だち関係が成立する瞬間は、子どもたち自身が人とかかわる喜びを身をもって感じていることが伝わり、教師も喜びを共感する瞬間である。また、事例②では、その瞬間を母親に伝えることで、共に成長を感じることができた。人とかかわりを育てるには、保護者とも連携をとりながら子どもの友だち

とかかわり方の成長を教師自身の喜びとともに丁寧に伝えていくことが大切である。

実践例3 (葛藤・共感)

「おばけやしきやってみよう」(9月)

<背景>

9月に入り、5歳児のクラスでおばけ屋敷を作り始める。3歳児はその様子に気づき、“明日はおばけ屋敷にいけるかな？”と毎日楽しみに待つ姿が見られるようになる。そして、ようやくおばけ屋敷が開店する日となる。

①「怖くて入れない」

「もも組さん！おばけ屋敷を開くから、来ていいよ～」と言いながら、5歳児が3歳児の手をひいて年長組まで案内している。

おばけ屋敷の中に入ると、机の脚に黒いビニール袋を貼ったおばけトンネルがある。「ここから入るんよ」と5歳児が入り口を教えてくれる。大喜びで3歳児は続々と入り口から入っていく。

ところが、G女は、入り口でしゃがみこんで困った表情をしてじっとしている。「どうしたの？」と教師が聞くと、G女は教師の手をぎゅっと握りながら「怖くて入れない」と言う。「Gちゃんは入ってみたいの？」と教師が聞くと、うなずく。

周りを見ると、近くに5歳児がいる。そこで、5歳児に「もも組さんが一人で入るのは怖いんだって、どうしたらいいと思う？」と問いかける。すると5歳児は「私が一緒に入ってあげる！私についておいで」と言ってG女の隣に寄り添う。G女もほっとした表情になり、手を引かれながら一緒にトンネルに入っていく。

トンネルの中では、5歳児は「こっちよ。大丈夫」と言いながら、G女を案内して通り抜けていく。出口から出てきた時には、G女は「先生、全部通れたよ」と達成感に満ちた表情が見られる。そんなG女の様子に5歳児もうれしそうな表情になっている。

【考察】

事例①では、教師がA女に寄り添いながら、「もも組さんが1人で入るのは怖いだってどうしたらいいと思う？」と5歳児に問いかけたことで、5歳児とG女のかかわりが生まれ、おばけトンネルを通りきることができていった。このように、年上である5歳児とのかかわりには、3歳児はまず教師がよりどころとなることで、安心して一歩踏み出しかかわることができていく。そのため、教師は、“入ってみたいけど怖いなあ、どうしよう”と躊躇する気もちを乗り越えられるよう、気もちを受け止め寄り添いながら、5歳児とのかかわりをつなぐ言葉かけをしたり思いを代弁したりして、安心感をもってかかわることができるようにすることが大切であると考えます。



図2 やったあ！おばけトンネル通れたよ！

②「ぼくたちもやってみたい」

5歳児のおばけ屋敷をひとしきり楽しんだ3歳児。クラスに帰ると、「僕たちもおばけ屋敷したい！」と張り切って教師に言いに来る。そこで、教師はおばけやチケット、懐中電灯などを作る材料をすぐに用意する。すると、H男が「懐中電灯、作る！」と言って、5歳児のまねをして緑のカラーセロファンを芯に貼りつけ、懐中電灯を1つ作る。1つできると、今度は、トイレットペーパーの芯を繋ごうとしている。だが、セロテープを貼ろうとすると、芯が動いてうまく貼れず、「できん〜」と言っている。「H君、何作ってるの？」と教師が聞くと、「鉄砲。おばけを倒すんよ」と得意げにH男が言う。

「でも、うまく貼れん」とH男が言っている。「困ったね。どうしたらいいかなあ」と周りの友だちにも聞こえるように教師が言っていると、その様子に気づいた5歳児が「教えてあげようか？」と声をかけてくる。H男は一瞬驚いたような表情をするが、すぐに「うん」とうなずく。「じゃあ、こっちおいで」と5歳児は、人ごみから離れてしゃがみこみ、2人で一緒に作り始める。「こうやって縦にテープを貼るんだよ。そしたらくっつくよ」と5歳児は実際にやって見せている。5歳児の言うことをH男は真剣に聞いている。その後、5歳児が芯をずれないように支えてくれ、B男もうまくセロテープを貼ってつなげることができる。5歳児が「ほら、できた！」と言うと、H男は笑顔になる。その後、H男はできあがった鉄砲を教師や同年齢の友だちに嬉しそうに見せていった。



図3 こうやって貼るんだよ

【考察】

事例②では、3歳児から「僕たちもおばけ屋敷やってみたい」という声が出たため、教師がすぐに必要な材料を用意すると、5歳児や同年齢の友だちの作っているものを見てまねをして作り始める姿が見られた。また、5歳児のおばけ屋敷に行った直後にすぐに作れる環境を用意したことで、5歳児が3歳児のおばけ屋敷を手伝いに来てくれる姿も見られ、ものとかかわりを通して、異年齢の人へのかかわりが見られていった。今回は、5歳児のクラスで作っているおばけ屋敷の道具を3歳児の教師は事前に把握し、3歳児も作ることができるように材料を準備していた。このように、日々の遊びの様子から、次の遊びへの展開

を予想し、材料を準備しておくことで、子どものやりたい気持ちが膨らんだ瞬間に、すぐに材料を使えるように用意していくことが大切である。そうすることで、3歳児なりに夢中で作る姿や人とかかわりに繋がっていったと考えている。

また、3歳児は5歳児のおぼけ屋敷に参加したことからの刺激を受け、「もも組でもやってみたい」という気持ちを膨らませていった。そして、5歳児のおぼけ屋敷で怖がっている時に助けてもらったり、3歳児だけで作ることが難しいところを教えてもらったりと、5歳児に優しくかかわってもらうことを通して、最初は緊張していた関係が次第に親しみの気持ちが膨らみ、目を合わせて微笑み合う関係に変わっていった。

このように異年齢で遊ぶ中で、3歳児は、5歳児に対して親しみやあこがれの気持ちをもってかかわる中で、かかわり合う楽しさを実感しながら人とかかわる力が育まれていくと考えている。そのため、5歳児の遊びに刺激を受けて、やってみたいという気持ちをもてるように、異年齢でのかかわり合いが自然に起こるような環境構成の工夫を行うことが大切である。

実践例4 (葛藤)

「葛藤する気持ち乗り越えて」(1月)

<背景>

I男は、活発で思うとすぐに行動に起こす姿が見られる。一方で、自分の思いが言葉にならず、すぐに手が出てしまうことも多い。

この日、I男は、友だちと一緒にマントを付けてヒーローになりきって遊んでいた。片付けの時間になり、マントをたたみ始めた時のことである。

①「僕もやりたかった」

「先生、大変！K君とI君がけんかしてる！」と呼びにくる。行くと、お互いにマントを引っ張り合っている。教師が「どうしたの？」と聞くと、K男が「J君と2人でマントたたもうとしようる

のに、I君がじゃまするんよ！」と言う。I男は、ぎゅっとマントの端を握りしめ、K男をにらんでいる。「そっか、K君とJ君が2人でたたんでたんだね。それを見て、I君はどう思ったの？」と聞くと、しばらく間があり、「僕もやりたかった」とI男は小さな声で言う。「そっか、I君も一緒にマントをたたみたかったんだね」と言うと、I男は涙目になってうなずく。「でもね、何にも言わずに急に引っ張ったんよ」と怒った様子でK男が言う。「何も言わずに引っ張られてどんな気持ちになったの？」と教師が聞くと、「嫌だった」とK男。「一緒にたたみたかったら、何て言ったらいいのかな？」と教師が聞くが、I男から返事はない。すると、心配して近くに来ていたK男が、「やらして」って言ったらいいよ」言う。「そっか、“やらせて”って言ったらいいの。I君、先生と一緒に言ってみる？」と聞くと、I男もうなずく。「やらせて」と教師とI男が言うと、「いいーよ」とK男。I男は、一気に笑顔になる。「入れてもらえたね。良かったね、I君。K君、入れてくれてありがとう」と言うと、2人とも笑顔になる。すると、一部始終を見ていた周りの友だちも「やーらせて」と言う。今度はI男も「いいーよ」と言って、大勢で仲良くたたんでいった。

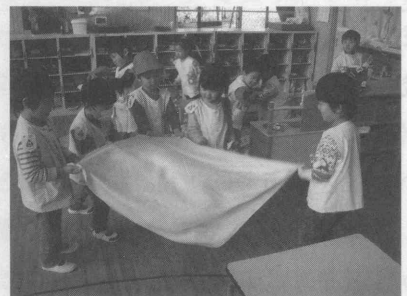


図4 一緒にたたもう

【考察】

事例①で、I男は、言葉よりも先に手を出してしまい、トラブルになっている。解決の場面でもI男は、思いが言葉にならず口ごもる姿が見られた。そのため教師は、I男とK男の気持ちや行為を十分に受け止めてかかわっていき、I男が自分の思いを伝えることができていった。

このように、中には、思いを十分に伝えられない子どももいる。特に3歳児はきょうだいの有無や第1子であるかなどによって、生活経験が異なったり、言葉の発達に違いが大きかったりする。そのため、教師は一人ひとりの家庭環境なども配慮しながら子どもの気持ちを丁寧に聞き、理解しようとかかわることによって、子どもが自分の思いを伝えられる経験をしていくことが大切である。

また、気の合う友だちが増えてくる時期には、同時に困ったり、思うようにならなかつたりする葛藤場面も生まれる。そのため教師は、子どもと共にこうした葛藤を受け止め支え、子どもたちがそれを乗り越える体験になるようにしていくことが大切である。

5 実践を終えて

実践を積み重ねる中で、教師や同年齢・異年齢の友だちとのかかわりを通して、3歳児の人とかかわる力を育てるための環境・援助について大切な点が次のように明らかになってきている。

①安心してかかわって遊べる空間や時間を保障し、教師や友だちと同じ場にいる心地よさが感じられるようにする

実践例1で、最初A女とB男は教師を取り合う関係であった。しかし、お気に入りの空間や教師の見守りの中で、同じ言葉を声を揃えて言う楽しさや心地よさを感じることを通して、次第にかかわり合って遊ぶようになっていった。

このように、入園したばかりの3歳児は、教師に「大切にされている」と感じることで安心して物事に取り組んだり、近くにいる友だちにかかわったりすることができる。また、同じ場にいる友だちと同じ行為を模倣し合いながら楽しむ心地よさの共有が、かかわりを生み出すきっかけになり、知らず知らずのうちに自分の世界を広げていく。そのためには、子どもが自分の周りには自分以外の子どもの存在を感じとれるような空間や時間を保障し、教師も子どもたちと同じ行為をす

ることが大切である。こうした援助により、信頼できる教師の傍らで、子どもは友だちと同じ空間にいることの心地よさを感じられるようになっていくと考える。

②子ども一人ひとりと温かい関係を育てることで、子ども同士やクラス全体の温かい関係づくりにつなげていく

実践例2では、教師のD女へのかかわりを周りの子どもたちは、熱心に見ている姿があった。教師が一人の子どもと温かい人間関係を結ぶことは、それを見ている子どもにとっても教師への信頼を寄せることにつながると考える。

また、E女は、教師がしていることのみねをしてD女にしてあげようとする姿が見られた。このことから、教師が一人ひとりとの温かい関係を大切にする姿勢は、子ども同士が互いを大切にする姿勢にもつながっていき、それはクラス全体の温かい関係をつくり出すことにもつながっていくと考える。

③葛藤を乗り越えることができるように、子どもの気持ちや行為を十分に受け止め理解しようとする

実践例4では、一緒にマントをたたみたいのに、思うように仲間に入れてもらえなかつたり、思いを伝えたいのにすぐに言葉にならなかつたりすることでトラブルになり葛藤する姿が見られた。このように3歳児は、まだ思いが十分に言葉にならず、言葉よりも先に行動するので、物を取り合う、気に入らないと相手をたたくななどのトラブルがたくさん起こる。これは、友だちづくりの本格的開始ともいえる。3歳児としては、このような葛藤体験も大切でそれを通過しながら、人とかかわる力が育っていくと考えている。

そのとき大事なことは、教師が起きていることに対して早急な判断や断定的な言葉は避け、子どもがどうしてもそのようなことをしなければならなかったのかに心を寄せ、子どもの気持ちや行為を十分に受け止めてかかわることである。特に言葉

にならない3歳児の気持ちを表情などから感じとったり、思いが言葉になるように子どもの思いを引き出す言葉がけをしながら子どもの気持ちを聞いたりして、理解しようとするかかわりが大切である。その教師の姿勢を子どもが感じとれば、子どもは自分の心の内を素直に表現し、また教師の言葉がけも素直に理解しようとする。このように葛藤場面では、教師が子どもの思いを十分に受け止め理解しようしてかかわることを支えとして、子どもたちがそれを乗り越える体験になるようにしていくことが大切である。

④異年齢とのかかわり合いが自然に起こるような環境構成の工夫をし、多様な人とかかわる体験ができるようにする

実践例3の5歳児のおばけ屋敷は、3歳児にとってはとても魅力的なものであった。5歳児のおばけ屋敷に参加したことからの刺激を受け、「もも組でもやってみたい」という気持ちを膨らませ、同年齢の友だちとかかわり合って遊んでいく姿が見られるようになっていった。

このように異年齢で遊ぶ中で、年下の3歳児は、年上の5歳児に対してあこがれの気持ちをもってかかわり、5歳児は、3歳児に対していたわりの気持ちをもってかかわる中で、かかわり合う楽しさを実感していくと考えている。そのため、5歳児のより豊かな遊びに刺激を受けて、やってみたいという気持ちをもてるように、異年齢でのかかわり合いが自然に起こるような環境構成の工夫を行うことが大切である。

⑤保護者と教師の連携を密にし、よりよい関係をつくる

実践例2では、保護者と離れがたかったD女が、優しくしてもらった体験をきっかけに、自分から友だちを誘い、新しい友だちとの関係を作っていた。また、そのことを保護者とも連携し、教師自身の喜びとともに伝えることで、4月からの成長を喜び合うことができた。

3歳児が初めての集団生活をおくるように、保

護者も新しい幼稚園の環境や子ども同士の関係で心配したり不安をかかえていたりすることがある。そのため、子どものよさ、成長を教師自身の喜びとともに保護者に丁寧に伝えていくことで、保護者自身も喜びを感じながら子どもと向き合いながら子育てができるように支援していくことが大切である。また、3歳児の「人とかかわる力」を育てるためには、一人ひとりの子どもの様子を十分に把握し、人とかかわりの中で子どもが学んでいることを保護者に伝えることによって、初めての集団生活でのかかわり合いの姿を理解してもらうことが大切である。

以上のように研究をすすめる中で、3歳児の「人とかかわる力」の育ちは、教師との信頼関係を基盤としながら、子ども一人ひとりが集団生活の中で、友だちと共感したり葛藤したりする1つひとつの過程の体験によって育まれていくことが分かった。特に3歳児では「出会い」「安心安定」「共感」「葛藤」という過程が大切であることが明らかになった。教師は、このような「人とかかわる力」の育ちの過程に見通しをもつことで、「その子の今」を充実させることが重要であると考え

る。今後の課題としては、3歳児以降となる4歳児、5歳児での「人とかかわる力」の育ちの過程を明らかにし、3年間の見通しと目の前の子どもの姿との両方の視点をもった教師の援助を明らかにしていく必要がある。

これからも、目の前の子どもの姿をさらにきめ細かく見とり、保護者とも連携を深めながら、「人とかかわる力」の育ちについて追究していきたい。

<引用・参考文献>

- 1) 榎沢良彦：「保育内容人間関係」p. 8, 2012, 建帛社.
- 2) 友定啓子：「幼稚園教育要領の基本と解説」pp. 56-61, 2012, フレーベル館.
- 3) 文部科学省：「幼稚園教育要領解説」p. 90, 2008, フレーベル館.